中堅・中小・ベンチャー

勝つ

タケックス・ラボ⑪

● 竹林を知り尽くした研究者

アレルギーに苦しむ子供たち

食品添加物・建材に活用

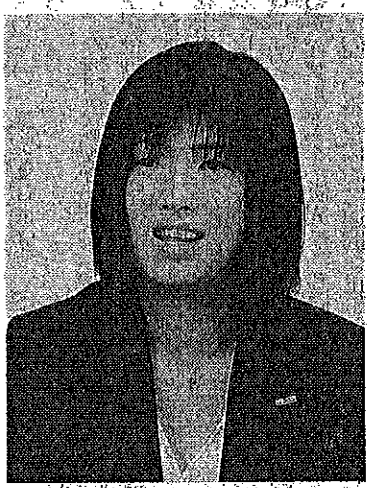
竹との思い出

「竹から生まれたかぐや姫ではなく、竹林で育った竹の魅力の伝道師」。タケックス・ラボ社長の清岡久幸は、自身のことをこう表現する。タケックス・ラボは食品添加物や建材など、竹の幅広い活用方法を提案する研究・開発メーカーだ。創立者・清岡の幼少時代の夢は旅客機の客室乗務員。少女時代は、まさか自分が将来、起業することになるなどとは夢にも思っていなかった。

清岡の実家は竹の民芸品を製作していた。竹製の千支置物などが主力製品。年末の需要期に向けて、1年間かけて製品を作り置きする。春夏秋冬、竹を伐採する時期によって竹の性質が異なるなど、竹の癖や特徴を肌で感じて育った。タケノコから竹へ成長する様子も身近で見てきた。幼少時代のオモチャも竹。清岡はそういった環境で育った。その生い立ちが、後の研究開発で役立つことになる。

心に残った出来事

80年、高校2年生の春のことだった。学校の健康診断で異常が見つかり、清岡は入院することになった。



竹の語った師さん
竹林での育ち
竹林の魅力の伝道
清岡久幸さん

約2年半の入院生活だったが、そこでの生活が清岡の人生に大きな影響を与えた。清岡は小児病棟で治療を受けていた。そこに入院しているのは、大半が清岡よりも年下の子供たち。そういった子供たちや看病に通う母親たちと、清岡は交流を深めていった。

小児病棟には重症の子供たちが多く、悲しい別れも体験した。そこで印象に残ったのが、残された母親たちの無念そうな姿だった。自分の子供の健康を守りきれなかったつらさを、母親たちの悲しい姿から感じたと言う。

もう一つ印象に残っているのが、食品添加物の怖さ。食品添加物アレルギーに苦しむ子供たちを間近に見た。また医者などから、食の大切さを繰り返し聞かされた。「この二つのことがずっしりと心に蓄積された」と、清岡は当時の生活を振り返る。

職人の声が耳に

2年半の入院生活の後、清岡は退院した。これから何に取り組もうか―。いろいろと思いを巡らせた。しかし、清岡を待っていたのは高校中退という現実だった。あこがれていた客室乗務員になる道も閉ざされている。清岡は空虚感に襲われていた。

そんな中、取りあえず家の手伝いを始めた。毎日工房の中をうろうろした。ある日、耳に入ってきたのが「グリーンの皮をはいでしまったから竹がカビてしまったわ」と言う竹細工職人の声。その声を聞いた瞬間、清岡の中で何かがつながった。

（敬称略）

▽所在地＝大阪府吹田市垂水町3の9の10、06・6821・2554▽社長＝清岡久幸氏▽従業員＝24人▽資本金＝1億7715万4000円▽売上高＝3億2200万円（07年7月期）▽URL＝www.takex-labo.com